

僕がキミを幸せにする

凍夜

始まりは幼少期

ここはとある施設。そこには様々な理由で親がいない子供達が預けられていた。そこに一人の男児がいた。

まだ九歳の男の子。その男の子には名前がなかった。どうやら生まれてすぐに親に捨てられ、偶然この施設の人に拾われ、それからここで暮らしていた。

なので本当の名前はわからないが、その拾った人が親代わりになり彼に勇士（ゆうし）と名付け、その彼女は彼を育てる事にした。そうして彼は麻倉勇士という名前をつけられた。

それから一年経ち、十歳になった勇士には気になる女の子がいた。その子は勇士と同じで親に捨てられ、ここに預けられた様で、その子はそれがトラウマになっており、人が嫌いになっていて、施設の中でも誰とも接していなかった。

ある時、その子を見た勇士は気になり声をかけるが返事をしてもらえず声をきけなかった。

でも、いつも一人でいるこの子がかわいそうと思い、相手にはされないとわかっていても毎日声をかけ、そばにいろようになった。

それから少しずつその子は勇士との距離が近づき、一緒に食事ができるまでになった。二人はずっと一緒にいて、寝るときも勇士の部屋に呼び、一緒に寝る様になった。そして、ある日その子が他の子供達にいじめられているのを勇士が見てしまい、その子を守るためにいじめていた子達とけんかをした。すぐに施設の人が止めて収まったが、勇士は少しけがをしていた。

それを見てその子は泣きながら初めて声を出した。

「ごめんなさい」

「大丈夫。これくらい平気だから」

勇士は初めて声が聴けてうれしくなり笑顔で返事をした。それからその子は勇士を信じる事になり、勇士もその子に返事をした。

「僕がキミを幸せにする」

そうして二人は恋人同士になった。もちろんその子はまだ勇士以外の人は信じれないので、ずっと勇士にくっついていく状況が続いた。

そんなある時、勇士の義理の親である麻倉洋子が二人と

一緒に食事をしているときに聞いた。

「勇士、その子の名前聞いた？」

「！？そういえば聞いてなかった。ねえ名前教えてくれる？」

「えっとね、覚えてないの。ここに来てからずっと怖かったから、全部忘れたくて」

「そっか。どうしようお母さん」

「そうね。それならあなたも私が面倒を見てあげるわ。それなら二人も一緒に入れるし。そのほうが勇士もいいでしょう」

「うん。でも、それだと僕達、その」

「何？」

「け、結婚できるのかなって」

「あら、結婚するの？」

「う、うん。僕がこの子を幸せにするって決めたんだ」

「そう。それなら勇士と一緒にじゃダメね。それなら、私が預かってるという風にすればいいわ。それなら同じ家族じゃないから二人は結婚できるわよ」

「うん。それがいいよ。いいよね、えっと」

「うん。私も勇士くんとなら一緒にになりたい」

「ありがとう。めぐみちゃん」

「めぐみ？」

「うん。キミの名前。これからずっと恵まれるようにって僕が考えたんだけどどうかな？」

「勇士くんが決めたならそれでいい。ありがとう」

「じゃああとは苗字だね。私達と一緒にじゃダメだから、違うのにしないと。勇士、何かある」

「そうだね。それじゃ天宮（あまみ）めぐみでどう」

「うん。私はそれでいいよ」

「そうね。綺麗な名前ね。じゃあ今日からあなたは天宮めぐみちゃんね」

「あの、よろしくねめぐみちゃん」

「うん。勇士くん」

こうして彼女は天宮めぐみという名をつけられた。それから洋子に学校に行こうといわれ、洋子は二人を自分の家に連れていき施設を出て行った。洋子はそのままそこで働いているが。

勇士とめぐみはちゃんと勉強はしていたので、学力は問題なかった。洋子は二人の事を市役所にも通わせる学校にも説明し

事情をわかってもらい入学させてもらえることになった。

そうして、二人は小学校に入り、卒業し、中学校になったがめぐみはまだ人見知りがあり、それでやはりクラスで小さいがいじめもあった。

そんなある時、めぐみはとうとういじめが悪化してきた事に耐えられなくなり、授業中に飛び出してしまった。

「めぐみ！？」

同じクラスの勇士が後を追う。めぐみは屋上に行き、そこから飛び降りようとした。策を超え、今にも飛び降りようとしていたが勇士がギリギリそれを止めた。

「めぐみダメだよ」

「嫌、もう耐えられないの！私は必要とされてない。どこにも居場所はないよ」

「あるよ。僕の側が！！ずっと一緒にいるって約束したでしょ」

「そうだけど！でも」

「大丈夫。僕が守ってあげるから！絶対、一人にしない。だから死なないで」

「勇士」

めぐみはとどまった。泣きながら勇士に抱き着き、勇士もずっとめぐみを離さなかった。

二人はこの事を先生達に話、いじめていた生徒達は処分を受け、二人には近づかないと決められた。

二人は少ししてから落ち着き、普通の暮らしに戻っていた。

そんなある時、勇士がめぐみに話を持ち掛けた。

「ねえめぐみ、一緒に音楽やらない？」

「音楽？それならよく一緒にしてるじゃん」

二人は施設に居た時から音楽をしていた。それは楽しいことで嫌な事を忘れようとしていたからだ。それでそこにあったピアノを

洋子から教わり、勇士が演奏し、めぐみが歌っていた。

勇士は部屋でテレビを見ていて、とある音楽番組を見てミュージシャンになりたいと思った様だ。

「うん。それをさ、本気でやってみようよ。ようはプロのミュージシャンになるってことなんだけど」

「プロ？私達が？」

「うん。一応、基礎はできてるんだしさ、そこから本格的にやろうって思って、今、その勉強してるんだ」

「う～ん、ゆうがそうしたいならいいけど、私できるかな。人前で歌うの」

「大丈夫だよ。僕が側にいるんだから」

「そうだね。ちょっと不安だけど、ゆうと一緒にならなんでもいいよ！ゆうがずっと一緒なら」

「うん。じゃあ二人で頑張ろう。それで、母さんを楽させよう」

「わかった。私も頑張る」

こうして二人は音楽の道を歩くことになったのだ。